

# 本当にわかる授業を仕組むために 内面の世界を重視した授業

環太平洋大学学長・  
中央教育審議会教育課程部会長  
梶田 勲一

新学習指導要領の趣旨を実現するために授業論が盛んです。授業技術ばかりでなく、そこに内面を考えていくことの大切さを梶田勲一先生にご教示いただきました。



梶田 勲一

かじた えいいち\*松江市生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科卒業。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長などを経て、2010年4月現職。文学博士。

## 子どもが本当にわかるとは

子どもたち一人ひとりに顔の後ろの世界、内面の世界があります。顔の表面は先生向けの顔です。「わかる」ということは、先生の言うことをそのまま受け入れることではありません。「自分なりに」のように納得した」という顔の後ろの世界での「わかる」という事実ができてこないといいけないのです。授業論とはそこから組み立てていかないといいけません。

ある時期、ビデオでの授業分析がはまりました。先生がこう言っていて、子どもがこう答えたというように、顔の表面に現れているものだけで授業をとらえようとしたのです。これも大事ですが、上手に発言するだけの子どもには問題が

あります。子どもは、先生がどう

いう答えを待っているのか、どういう取り組みを待っているのかを考え、先生の期待に上手に答えようとするのです。顔の表面だけ上手に振る舞う子が出てきてクラスみんなが同調し、わかったような顔をつくるようになってしまいます。

でも、「確かな学力」といわれるような、本当にわかる、できるといった、上つ面でない学力をつけていくためには、子どもの顔の後ろの世界のことを本気で考えないといいけません。

内面を意識した授業の手立てを考えてみますと、そのポイントは、次の4つになります。

### ポイント1 発問の工夫をする

1番目は、昔から言われてきた「発問の工夫」です。

師は、子どもの答えが初めから自分の期待していた答えでないといいけないと思いがちです。最後は正しい答えに着地しないといけません。正しい答えが出てくればよいとげしないといけません。

子どもがあることを発言したり、書いたりしたときに、どういう理屈、こだわりがあるかを見て取らないといけません。子どもなりに土台になる考え方があって、その裏にある子どもの認識やこだわりの構造を見て取り、そこに働きかけなければ、「なるほど、そうなのか」と腹に落ちたわかり方にならないのです。単に最終的な答えが出てくればよいというのではないのです。

### 「授業の実際場面から」

いまから20年ほど前、こんな授業発表を見ました。  
理科の「流水の働き」の単元でした。事前に、上流と下流で石がどうなっているか子どもたちに調べさせていました。そうしたことを前提にしたまとめの学習の授業でした。  
「どうして上流の石はゴツゴツ

### ポイント2 教材の工夫をする

2番目は、「教材の工夫」です。利用する教材には、いろいろなあります。ひとつは、発問を支えるもの、あるいは発問の役割そのものをするような教材を使うことです。また、子どもたちの学習の手掛かりとなるような教材や、学んだこと・考えたことを自分なりにまとめてみるための教材も活用することです。

最後のまとめの教材は論理的思考力をつけていくうえでとても大切です。ワークシート形式で、自分なりにつかんだものをまとめてみるのです。子どもたち同士で話し合いをさせて、小グループとしての結論をもつことも大切ですが、最後はひとりだけで考えなければいけません。わたしは何を考えたか、わたしはどう考えたか、わたしがわかったことの中身は何か、これらをまとめるための教材が必要なのです。

2006年の国際学習到達度調査(PISA)における読解力で世界一の点数をとったのは韓国です。2003年はフィンラン



発問によって関心が引き立てられ、取り組んでみたいという気持ちにさせないといけません。そこから真の主體的な学習がはじまるのです。

子どもの顔の後ろの世界には先生にも見えにくい、思いやこだわり、気持ちが潜んでいます。それをどう見抜き、察していくかを踏まえて新たな関心をどう引き出すかが大事です。どういう課題意識をどういう手立てで引き起こすかです。発問を工夫して、子どもの問題意識をシャープに焦点づけるのです。

最初の導入の問いを工夫したり、いくつかの問いを出して、本当に考えさせたい課題に向けた中心発問に導いていく、といった準備をしたりします。中心発問をしつかりとらえさせるために、いろいろな言い換えをしたり、裏付けになる教材を示したりします。こうした発問の工夫が大事なのです。先生側の願いと子ども側の「これをやるぞ」という気持ちが結果として呼応することになるわけです。

### ポイント3 教師が期待する答えを押しつけない

3番目として、教師は自分が期待していた答えを押しつけるようなことがあってはいけません。

教師はそれぞれの課題について、何が正しくて、何が間違っているか、よくわかっています。でも、子どもは正しい答えに一足飛びでたどりつくわけではありませぬ。子どもなりのこだわりや発想があつて、紆余曲折を経て、最後は正しい答えにたどりつけばよいのです。しかし、得てして教



の棒と5つの棒だから8つになるよね。だから3+5は8だよ」という具合です。そうした具体的な目に見えるもので操作をしないと物が考えられないのです。逆に5・6年生になると数や量が抽象的につかめるようになり、□を使った数式があります。3×□=18。□の中には何が入るかというわけです。中学校なら□はXです。小学校高学年では、抽象概念が使えるようにはなつたけれど、中学校とは違って具体的なところが残っているの、まだ□を使うわけです。いずれにせよ、「形式操作」の時期は抽象性が高くなっています。

したがって、どのあたりで具体的な活動を切り上げて、抽象的な活動にするかを考えないといけません。3・4年生が難しいのは、一人ひとりの発達に開きがあることです。

内面を考えると、授業も一筋縄ではいきません。発達時期による抽象的な思考についての一般的な発達段階を理解していると同時に、個々の子どもに即して思考の仕方がどの段階であるのか



「上流の石は山から崩れてきたものだからゴツゴツでした。それが、雨が降って少しづつ下に流されていきました。流されていく中で石同士がぶつかって角が削られて、スペースの石になったと思います」と、先生が期待していた答えが出てしまいました。

「上流の石は山から崩れてきたものだからゴツゴツでした。それが、雨が降って少しづつ下に流されていきました。流されていく中で石同士がぶつかって角が削られて、スペースの石になったと思います」と、先生が期待していた答えが出てしまいました。

「上流の石は山から崩れてきたものだからゴツゴツでした。それが、雨が降って少しづつ下に流されていきました。流されていく中で石同士がぶつかって角が削られて、スペースの石になったと思います」と、先生が期待していた答えが出てしまいました。

見極めなければいけないのです。道徳性の発達段階でも同じです。小学校低・中学年では多くは「結果道徳」です。高学年では「動機道徳」になります。中学校では、やった結果をどう考えるか(反省)も基準になります。

子どもたちは建前的な発言もありますが、さて本当のところはどうかということです。本当に子どもの顔の後ろの世界に訴える形で、学びが進展していつほしいものです。子どもの顔の後ろの世界を洞察して、そこにこだわって、一人ひとりの顔の後ろの世界に着実に地に足をつける

子どもたちは建前的な発言もありますが、さて本当のところはどうかということです。本当に子どもの顔の後ろの世界に訴える形で、学びが進展していつほしいものです。子どもの顔の後ろの世界を洞察して、そこにこだわって、一人ひとりの顔の後ろの世界に着実に地に足をつける

内面に訴える授業が子どもの学習を深める

これは確かに理科の正しい手順を踏んだ授業でした。まず上流と下流の2つの現地調査をさせ、仮説を立てさせます。そして仮説を実証するにはどういう実験をしたらいいかを発表させて実証の作業に入っていくわけですね。

これは確かに理科の正しい手順を踏んだ授業でした。まず上流と下流の2つの現地調査をさせ、仮説を立てさせます。そして仮説を実証するにはどういう実験をしたらいいかを発表させて実証の作業に入っていくわけですね。

ポイント4

内面の世界の発達段階を意識する

4番目は、子どもの発達段階で顔の後ろの世界が異なることを意識することです。思考の発達段階では、小学校1・2年生は「具体操作」の時期です。5・6年生は「形式操作」となり、3・4年生はその移行期です。

改訂 実践教育 評価事典

これでバッチリ!教育評価!

監修・著/梶田 勲一・加藤 明  
B5判264ページ 定価2,520円(税込)

新指導要録(新しい評価の観点)に対応して改訂!

教育評価の基礎理論を解き明かし、各教科の「授業づくり」にどう生かすかを詳説。絶対評価(目標標準評価)の時代に、評価の目を大切にしたい教育実践を目指す教師必携の一冊。



- 第1部 対談「これからの学習評価」
- 第2部 授業づくりと教育評価の基礎・基本
- 第3部 各教科の授業づくりと評価
- 第4部 教育評価の基礎知識

梶田 勲一先生の教育コラム開設!

ぶんけい 教育コラム

検索